

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.6

2005年3月25日発行
鶴見大学文化財学会

漆芸修復研究会

中里 壽 克

文化財に関する社会的関心は、近年ますます高まっている。それは文化財が単なる「お宝」でなく社会的な財産であるからに他ならない。

近年の自然災害は目を覆うばかりであり、それが多発する所に危機感が募るばかりだが、海外で頻発するテロも遠い国の話ではなく、直接に日本にも影響ある事を自覚しなければならない。

文化財がこの様に自然災害やテロに無関係ではない事は新聞などで報道される通りである。文化財の保存というのは、今や一国内で処理する時代は終わっている。日本の文化財は世界中に散らばっているし、外国の文化財も日本で観賞されている。国際的な協力や研究なしには根本的な保存は成り立っていかなくなっている。

例えば漆芸品は前記の様に世界中に所在するが、これらの取扱いをみると、日本人には耐えられない様な、日本の博物館では考えられない様な展示をしている事が多い。何十年!!もケースに入ったまま、ほこりが1cmも積っていたなどという信じられない話も伝わっている。これはつまり日本美術の取扱いを知らず、自分達の美術と同じ様に考えていた、それだけの話である。日本の文化財の関係者が多く海外に出かける様になって、こんな話は嘘の様な話になった。

日本美術の特殊性が、ヨーロッパの文化財研究者なら誰でも知る様になって喜ばしいが、知ってもらっただけではまだ解決にはならない。ようやく日本美術の知識が普及はしたが、日本美術の材質や技法、更には修復技法まで普及するまでに至っていなかった。

近年ようやくその事の重大さに気付いて研

究者の交流が頻繁に行われる様になり、急速に改善されつつある。

この様な大きな流れの一環として東京国立文化財研究所（東京文化財研究所）は毎年秋に国際シンポジウムを開催し、文化財研究者の交流を計って来た。平成5年には「文化財の保存と修復」をテーマに漆芸品を取上げ、国際的な関心を集めた。ここに日本の漆芸関係者の多くが参加した機会に「漆芸修復研究会」が発足した。平成6年の第一回から昨年は日光を開催地として第10回が催された。

この会の主旨は日本で活動している漆芸修復に関係する者が、修復に対して同じ認識を持つことにある。諸外国で日本の漆芸修復技術への関心が高まり、当然国内での個々の対応に矛盾がない事が求められる。

活動の骨子は次の3つである。

1. 修復技術の情報交換と普及
2. 漆芸技術の復元研究
3. 修復理論の検討

第10回の昨年までの研究会の内容は、もちろん修復に関する話題が主であるが、修復の事例を報告する場合は、依頼者の都合で内容を公表出来ない場合などがあり、直に情報が伝わらないことも多い。どう修理するかを検討するため破損している漆芸品を前に修復技術のシュミレーションをやったりした。又海外で実際に修理を実践して来た人の話を聞くことも出来た。又昨年の日光での研究会の様子に日光東照宮で行なわれている塗漆建造物修理の現場を見学したこともある。今年は6月頃輪島で行うべく計画しているが、興味ある人はぜひ参加して下さい。参加費だけで会費はありません。

自立する学会を目指して

関 幸 彦

文化財学会が設立されて7年がたつ。学科の誕生と同じ時期で、人間で言えば学齢期となる。思慮分別とまではゆかないが、周囲の状況が理解できる段階である。人の歩みと同じではないが、文化財学会の会員数も次第に増加し、世間への認知度も高まりつつあるようだ。

「7歳までは神のうち」としばしば言い慣らわされることがある。これには様々な意味が込められている。“人と成る”すなわち「成人」すること自体が人生の画期だった古代や中世の時代は、7歳までの生死は神仏と同居している、との発想も強かった。あるいは男女の性差が判然としない聖なる時期を、こう表現したのかもしれない。

いずれにしても、神仏の保護を必要とする段階ということになる。七・五・三の儀式がそうであるように、この数字は必ずしも無意味なものではない。本学会も、その意味では7年という節目にあたり、自立の時期を迎えつつあるようだ。

誕生まもない文化財学会は教職員と学生諸君が一体となって、組織づくりをしてきた。走り続けて、どうやらここに漕ぎつけた。それが実感だろう。神仏の加護から自らを解放し、自立する世界がおとづれようとしている。この7年前後の年月は、学会が羽ばたくための準備の時期でもあった。

卒業生が社会で活躍し出し、大学院生も増えはじめ、学会は、文化財学科とともに新しい段階に入った。これまでの『文化財学会報』にくわえて、今年度より『文化財学雑誌』の発刊が実現した。会報と会誌という二本柱を持ったことで、わが学会もまさに一人前になったのである。

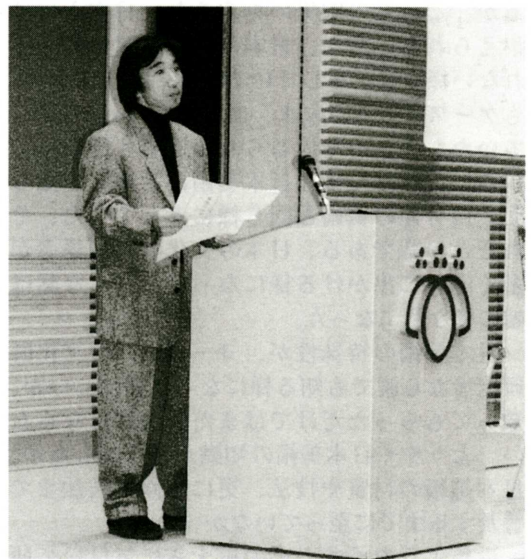
『文化財学雑誌』には、教員・院生諸氏の論文が配され、学会設立の当初よりの関係者とし自慢の種が増したことにもなる。だが、それに甘んずることなく、自立する学会に向けての研鑽も求められよう。文化財学それ自体が学問的な大きな潮流となるまでは、それ

の時間が必要とされるはずだ。7年を生き抜いたこの学会が、更なる発展のためには個人の力の結集が求められる。

学会運営に向けて、今後は財政基盤の確立をはじめ、解決しなければならない問題も少なくない。学会員の会費納入のシステムをどう円滑化するか、さらには卒業生の力をどのように学会に反映させてゆくかなど、課題は多い。

それにしても、ここに至るまでには会員相互の尽力が大きかった。すでに無常の道におもむかれた石井進先生にも、本学会としてご協力を賜ったことも一度ならずあった。「石井文庫」が文化財学科および学会に寄託されたことも特筆されるべきことだろう。力強く成長しつつある文化財学会の様子を見ていただきたかった。

自立の志ということで思い出されるのは、米大統領ジョン・F・ケネディが国民に語った次のことばだ。「国が何をしてくれるか、ではなく、諸君が国のために何をなすことができるか、である」と。卒業生もふくめ、会員諸氏のご尽力を今後とも期待したい。



文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「弓矢・刀剣・甲冑の世界」

報告 2年 高橋 苑子

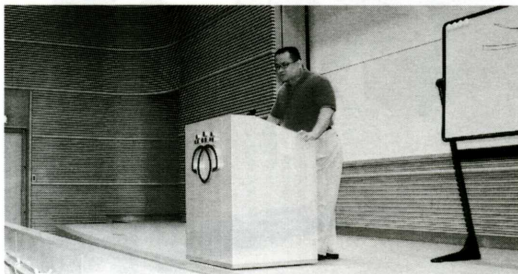
平成16年度文化財学会春季講演会は、6月5日土曜日に『弓矢・刀剣・甲冑の世界』と題して開催されました。

今回は、駒澤大学講師でいらっしゃる近藤好和先生をお招きし、有職故実の視点からの文化財学・伝世工芸遺品をいかに歴史学の資料として扱うか、ということなどを狙いとしたご講演をいただきました。

まず始めに伝世工芸遺品として漆工品・金工品・染色品・焼き物・武具・馬具などをあげ、現在はそれらのほとんどが美術鑑賞の対象であるという点を指摘されました。

根本的に「モノ」は実用の為に制作されたにも関わらず、今日は美術的価値が特に重視され、その実用論を説かれることは少ないということです。つまり遺品本来の制作目的と現在の評価の間には大きな差が生じており、その最たるものが武器・武具の類であると言われているのです。

近藤先生は、実用することができないでいる、つまり実用品としての役目を終えた武器・武具においては、美術鑑賞の対象とし、保存していくことに何ら異議はないとおっしゃっていました。しかし、客観的な歴史事実として武器・武具は殺傷・人殺しの道具であることは確かなのであり、かかる歴史事実を追求せずに美術的側面ばかりを強調すると、武器・武具の本質を説いたことにはならない



のだともおっしゃっていました。

まず甲冑は和訓では、甲=よろい、冑=かぶとと対応し、よろいは胴部の防御具、かぶとは頭部の防御具であったそうです。しかし8世紀に一部、10世紀以降には対応が甲=かぶと、冑=よろいと逆転し、誤解のない対応として鎧=よろい、兜=かぶとが出てきたそうです。これらのことに対して先生は、歴史的文献を読むときに、文脈を理解し考えることが必要であるとおっしゃっていました。

次に刀剣では、「たち」と「かたな」の違い、「ほこ」と「やり」の違いをお話しして下さいました。「たち」と「かたな」においては、主に外装様式での分類であり、最も大きな違いは機能の面であるとおっしゃっていました。「たち」は打つ・切る、それに対して「かたな」は突く・刺すということでした。また、全世界的存在であった「ほこ」と日本独特のものである「やり」の違いは、使用法であり、両手で突く「ほこ」に対して「やり」は片手で滑らせるように突くとのことでした。

最後に弓矢については弓矢は正式には弓箭であり、それには弓と矢だけでなく箆・空穂などの弓を入れる容器も含まれるのだとおっしゃいました。6世紀から14世紀の戦士を弓射騎兵・打物騎兵・弓射歩兵・打物歩兵の四形態に分類、各時代における戦闘方法から弓矢の攻撃具としての歴史的重要性を説かれました。弓矢や刀剣での戦闘は鉄砲が伝えられて以後も併用されていたそうです。また素材がもろかったり、飛び道具であるために、残っているものが少ないとおっしゃっていました。

近藤先生のお話を聞いて、知識を掘り下げることがもちろん、ただ美術品として見るのではない広い見方も出来るようになりました。図版を用いての説明だったので、より理解する事が出来ました。

ご講演の後の質疑応答では、武器・武具の使い方や特徴に関する熱心な質問がなされました。

この様に春季講演会は、文化財学科に所属している私達にとって、弓矢・刀剣・甲冑の世界への興味をより刺激させる内容でした。最後になりましたが、近藤好和先生、御講演有難う御座いました。

〈秋季大会シンポジウム〉
 総持学園創立80周年記念
 「古都鎌倉の多角的検討」

報告 3年 町田 光世

平成16年度文化財学会秋季シンポジウムは、総持学園創立80周年記念とも重なり「古都鎌倉の多角的検討」と題され、11月13日土曜日に開催されました。

はじめに問題提起として本学教授の河野眞知郎先生にご講演いただきました。河野先生は、現在鎌倉を世界遺産に登録しようという動きがあるなかで、そのメインテーマとなっているのが武家の古都であり、その意味合いを今回のシンポジウムを通じて3つの多角的な視点から理解していただきたいと述べられました。

まず第一の視点・文献学的研究から、東洋大学講師の細川重男先生が「得宗専制と御内人」という論題でご講演されました。細川先生は鎌倉北条氏の従者である御内人、いわゆる得宗被官は現在そのイメージが確固とされていないと指摘され、御内人の定義を鎌倉北条氏得宗家の被官であるとし、他の北条氏庶家被官・得宗家族被官とは区別する必要があり、その大部分は御家人であると述べられました。

続いて、本学大学院文学研究科博士前期課程2年の松吉大樹さんは「得宗被官の性格」という論題で、若宮大路東側溝（北条邸西堀）から出土した3点の人名木簡が奥州石河氏の可能性があり、石河氏が得宗被官として得宗家の私的な家臣であることから、この普請が北条氏の私的なものであったのではないかという考察を述べられました。

次に第二の視点・物質史学的研究から本学大学院文学研究科博士前期課程2年の古田土俊一さんが「鎌倉所在石塔に関する一、二の問題」という論題で講演されました。鎌倉に数千以上あるといわれている五輪塔は、完存しているものや記念銘のあるものが少なく調査研究が活発に行われてこなかったことから、五輪塔の各部分を細部まで計測し、高さと幅をはじめとした特徴の多く表れる部分の比率をグラフに表し、年代ごとに分類するという研究結果を述べられました。

続いて、本学大学院文学研究科博士前期課程2年の星野玲子さんから、「岩船地藏（砂岩石造物の保存処理と経年変化）」という論題で講演していただきました。石造物の劣化要因は大きく3つに分けられ、その保存対策はいくつかあります。しかし石造物は、置かれている環境が様々で保存方法の確固としたものはありません。この様な現状を

受け、平成13年より約1年かけて行われた岩船地藏と海蔵寺にある宇賀神の保存処理に関する報告をされました。岩船地藏と宇賀神の状態は3年経った今でも良い状態を保っている為、現段階ではこの保存処理方法に問題はないものとして今後も観察を続けていくと述べられました。

第三に「古都」の考え方を視点として、本学教授の関幸彦先生が「鎌倉とは何か」という論題でご講演されました。関先生は、鎌倉は中世で終わるわけではなく、近世・近代と都市としての鎌倉は続いており、それぞれの歴史の層に対応し都市鎌倉が持った意味を述べられました。

続いて東慶寺住職の井上正道住職が「駆け込寺 松ヶ岡東慶寺」という論題で、1285年に北条時宗夫人であった覚山志道尼が開創した松岡山東慶寺の歴史についてご講演されました。東慶寺は開創以来駆け込めば離縁できるという縁切寺法を約600年近く引き継いでいた女性救済の寺で、その寺史について、ご住職ならではの独自の視点を交えつつ述べられました。

最後に総合討論として本学教授・河野眞知郎先生を司会に今回ご講演された方を交え、講演内では触れる事の出来なかった補足説明をはじめ、会場からの質問に回答していただくなど活発な議論が行われ、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

また、今回のシンポジウムでは鎌倉をテーマとしていましたが、文化財学科が鎌倉に限らず何事にも多角的視点を持ち、様々な事に理解を持たなければならないと実感できる素晴らしい機会になったのではないのでしょうか。



学会 左見右見

文化財学科の学生としての1年

1年 木場 直哉

大いなる期待と多少の不安を抱いて入学した私達1年生は、高校と違い大学生活は全てが新鮮なものでした。高校の時には無かった専門分野・サークル活動・アルバイト・親睦会など、一人ひとりが大学に入って違う感銘を受けたのではないのでしょうか。そして、入学前に抱いた自分の文化財に対する関心も、この1年で大きく変化したのではないのでしょうか。

私自信、文化財学科に入る前は、歴史や美術などの分野に対する漠然とした目的意識で入学しましたが、1年生での幅広い分野の授業を通して、専攻したい分野も見えてきました。友達の中には、1年生で既に鎌倉の発掘現場で作業に携わる人もおり、同じ学問を志す仲間として、大変いい刺激になりました。ほかにも、1年の実習IA・IBなどのレポート作成や授業、サークルでの先輩との付き合い、社会人となれば、まず望む事の出来ない、夏休み・春休みの約4カ月の長期休暇などの活用を通して、今まで以上に多くの事を得ることが出来た1年でした。2年生は、夏休みの発掘実習や学芸員資格を得るための博物館学・歴史学の基本である史料を読むために、くずし字・異体字などを学ぶ歴史資料講読など、更に専門的なことを学ぶ事になります。

この様に大学4年間は、愉しいからこそ時間の過ぎるのも早いものです。4年間に有意義なものにし、文化財の分野だけでなく色々なものに対しても、学科の枠組みを越えて、幅広い視野で学びたく思います、そして、これからも大学での時間を大事にしていきたいと思います。

大学生活の折り返し地点

2年 川又 星児

入学してから1年間は慣れない環境での生活にとまどいを感じていました。1年目は実習での課題も多く、とにかく課題をこなすことに追われ苦労しました。また一般教養の授業も多く、自分が当初やりたいと思っていた勉強に取り組む余裕を持つことができませんでした。

自分が何をしたいのか、まだ迷っている学生が多い中で、2年生から様々な分野の授業を受けられることは、自分の興味関心を広げる上でも、又後期ゼミを決定する際にも大変参考になりました。

私は今年度の始め、取得する科目を教務課に提出したときは、対外史を専門にする予定で科目を選択していました。しかし、前期を過ぎてさまざまな専門科目を学んでいくうちに、美術の方面に心が惹かれるようになりました。その為、ゼミも当初の予定を変えて、美術系にすることにしました。美術の系列においては、まだまだ多くの必修単位を取得しなければならないので大変ですが、頑張っていこうと思います。

来年度はいよいよゼミが始まります。所属しているサークルの先輩方から様々な体験談を聞くと不安もありますが、今はまだ楽しみで仕方がないです。

大学生活は残り2年、折り返し地点になりました。自分の専攻する分野の研究を深めると共に、3年後期からは就職活動も始まります。しっかりと将来を見据えて、残りの学生生活を有意義なものにしていこうと思います。



1年間の思い出とこれからの目標

3年 井上 文

無事3年間で過ごす事ができ、気がついたら大学生活もあと1年余りです。3年次は特に時間の流れを早く感じ、あっという間に1年間という期間が過ぎてしまいました。来年度はいよいよ就職活動と卒業論文を中心とした1年間になるとともに、16年続けた学生生活最後の年となるので、悔いの無いように過ごしていきたいと思います。

充実した1年でしたが、特に印象深く残っている思い出として鶴見大学文化財学会春季大会が挙げられると思います。毎年各方面の先生方をお招きしていますが、今年の春季大会にいらした近藤好和先生のお話もとても興味深いものでした。本学で有職故実の授業を担当していらっしゃる工藤先生がとても共感していらっしゃいました。この講演を聴いたあとの授業は、いつも以上に身が入った事を今でも覚えています。内容は武具の美術

的な価値やその使い方、また兵隊の編成の移り変わりについての説明、そして甲と冑・太刀と剣・長刀、鎗と槍の違いや弓箭の話をたくさんしていただきました。マイクを使わない講演で後にも先にもこのような講演は見られないのではないのでしょうか。とても有意義で勉強になったと思える講演でした。また学科は変わりますが、ドキュメンテーション学科主催のデジタルライブラリー国際セミナーの講演は、ドキュメンテーション学科に限らず文化財学科にも通じる講演で、世界の文化財がどのようにウェブ上に公開されているかが分かり、文化財の保護にも役立っているとの話で、文化財学会の春季・秋季大会でもこのような講演があっても良いのではないのかなと思いました。

今後も分野は違っていても皆が勉強になったと思える、より良い講演会を学会委員に期待するばかりです。その分私たちも文化財学科がさらに発展するように、頑張っていきたいと思えます。

我、青春の4年間

4年 岡村 祐美

卒業を迎える。入学した頃がまだ昨日のこのように思えるのに、早いものであれからすでに4年経ったということだ。新潟の田舎から出てきた私にとって、横浜での生活は大変魅力的なものであった。行くところ全てが新鮮で、見るもの全てが新たな知識と情報の宝庫ともいえた。

1年生の頃は、帰りの道、電車を途中で降りては色々な所を散策した。特に目新しい発見があったわけではないが、この先田舎に帰ればもう訪れる機会も限られると思うと、とにかく色々な所に行きたいと思ったものである。今思うと、私の4年間を支えてきたものはひとえにこの「とにかく色々な所に行きたい」という思いに通じる好奇心だったかも知れない。

この好奇心は様々な場面で発揮された。石器を作ったり、土器を焼いたり。友人に言わせると私の4年間は土器作りに集約されるようだが、いやそんなこともない。所属した日本精神研究部会では「お百度と丑の刻参り」といったテーマでレポートもまとめ、この活動をどう発表するかに頭を悩ませることもあった。またその他の部会の活動に参加することも多かった。活動には部員でなくとも参加しやすい雰囲気があり、さすがに一人では行けなかった鎌倉の山の中を、先生や先輩方のガイド付きで歩き回れたことは大変貴重な体験であった。

最後に4年間を振り返り痛感するのは、時間はあろうが無いということだ。楽しい時間は本当

にあつという間で、新たな道に進む時はすぐにやってくる。良いことも嫌なことも、この4年間何度もあったように思うが、今はただ偶然にも同じ時にこの文化財学科へ集まり、あつという間の時をともに過ごした友人達、そして先生方に、ただただ感謝するのみである。



文化財学会とは

3年 柳田 修次

よく文化財学科の人から聞かれる質問があります。「文化財学会って何やっているの?」この言葉を聞き、文化財学会という組織の中の学会委員が、春の講演会や秋のシンポジウムを運営していることを知らない人が多いと感じました。この学会報も先生方が作っていると思う人が多いのではないのでしょうか。

春の講演会や秋のシンポジウムを開催するにあたり、先生方とも話し合いますが、主に私たち学会委員が打ち合わせをし、何ヶ月も前から準備をしています。例えば、当日のスケジュールやレジュメ、ポスター作成、懇親会のメニューなども考えます。また、この学会報も学会委員が学生や先生に原稿の依頼をしてレイアウトを考え作っています。学会委員がこのような活動を行っていることが知らなかった方も多いのではないのでしょうか。

私たち学会委員はこのような活動を通して文化財学会の発展を目指しています。しかし、この発展には、みなさんが文化財学会に興味をもち、シンポジウム等に積極的に参加していただくことが不可欠であると感じます。きっと、参加することで授業では学ぶことのできない何かを得られることでしょう。

そして、最後にこの場を借りて、ふがない委員長への指示を聞き、がんばってくれた学会委員をはじめ、春の講演会、秋のシンポジウムの開催を手伝っていただいた方々に心からお礼申し上げます。

人脈を作ろう

4年 小坂 康人

いきなり私事で恐縮であるが、高校時代に恩師からこんなことを聞かれたことがある。「お前たち、大学は何をしに行くところかわかるか?」と。正直「そりゃ、勉強か遊びだろ」と思った。するとその恩師は「大学ってところは、人脈を作りに行くところだよ」とおっしゃった。「はあ、人脈って?」とそのとき聞き返した記憶がある。「人脈」というと、コネや縁故といったものが頭に思い浮かぶ。私もその時はそのように思っていた。しかし、最近その恩師と卓を囲んだ時に、「大学時代に築いた人間関係は一生続く。それは自分の財産でもあるんだ」という言葉を聞き、やっとその意味がわかった。多くの人と接すること、つまり「人脈」を作ることで、それが財産となり人生が豊かになるということである。

前置きが長くなったが、この文化財学科は「人脈」を作るのに最高の場所だと私は思っている。先生も、先輩も、後輩もすぐそこにいる。自分から前へ進めば、いくらでも機会はあるのだ。中には、そういう人間関係が面倒だったり煙たかったりする人もいるだろう。しかし、将来同じ思い出を語り合える人がいることは、そのときを有意義に過ごした確固たる証となるだろう。

私自身、学会委員や研究部会に携わる事で、それなりに「人脈」を作ったつもりである。しかし、この4年という月日を考えればあまりにも少ない。大学を卒業した後的人生を考えると、大学時代ほど自由に時間が使える時はないはずである。勉強も、遊びも当然大切であるし、その中で築く人間関係もあるだろう。4年という時間は短い、後輩諸君にはたくさんの「人脈」を作ってほしい。「一年間を振り返って」というテーマで、ということだったが、全く関係のない文章になってしまい申し訳ありません。

この1年を振り返って

大学院修士1年 松井 輝夫

私は文章を読むのも書くのも苦手であり、一年間色々な出来事があったが何について書くのが適切なのか皆目分らない。更に「大学院生としてそれなりの文章を」と、期待されてもいないのに変に気負い余計に書けない。そんな時、ある先輩から研究態度についての指摘を受けた。

元来私は大学に於ける先輩と後輩という関係に否定的だった。高校までは社会構造を経験していくうえで必要な関係であり、実社会ではその経験を活かし社会構造を円滑に動かす為に発展した上下関係が必要である。しかし大学は社会に出る前に個人を探究し、自分の未知の部分を開拓していく場であるから、先輩・後輩という関係は限りなくフラットであるべきだと考えている。

大学院へ入学した当初は、今までとは極端に違う雰囲気以身構えた事もあったが、早々に解消した。それは先輩達が、私の理想とする限りなくフラットである関係を力む事なく実践し、ウィットにも富んでいるので、個人として、全体として非常に魅力的なのが理由である。そのため指摘を受けても素直に受け止める事ができるのだ。ここで私は大学生、大学院生としてのあるべき姿を感じることが出来た。お互いに尊重し合いながら競い合い、困った時に助け合えること。簡単に当たり前の事であるが、世代や年齢を気にせずにこれらの行動を平等に行える場は大学にしかないのではないか。それを今改めて気付かせてくれた先輩方には非常に感謝している。先輩達は考えて行動している訳ではないのだろう。この良い意味での先輩・後輩という関係を大学院生だけでなく学部生同士、さらに学部生と大学院生の繋がりとして今後大きく発展させていきたい。



各学年の実習の感想

1年間の実習を振り返って

1年 細島 志浦

実習が終わった今となっては、辛く苦しかったことも全て良い思い出となりました。実習は短期間でしたが、内容は濃く、貴重な体験ばかりでした。

前期は実習ⅠAで、様々な文化財を見て回りました。特に印象に残った場所は、静岡・山梨の一泊研修旅行です。大善寺や恵林寺、国分寺跡、浅間神社や久能山東照宮など、一泊二日で多くの文化財を見て本当に勉強になりました。また、一泊を通し、友達の輪が広がり、先生方とも気さくにお話しができ、交流を深めることが出来ました。朝方、友達と見た富士山はとても壮大で、何か大きな区切りを感じました。勉強をすることはもちろん、友達や先生方との絆がますます深まり、いろいろな意味で実りの多かった研修だったと思います。一泊研修旅行も含めて毎回終わるごとに必ずレポート提出があり、期日までに終わらせようと必死に調べ作成しました。

このレポートのおかげで、自分が物に触れる時、ほんの入口部分だけですが、どんな点に気をつけるか、注意して見る機会が多くなりました。

後期では、実習ⅠBで土器の修復や製図、レイアウトや校正を学びました。数ミリのズレが後に大きな誤差となることを身をもって知りました。完璧に仕上げるには、妥協をせずに正確に作業することが大切だと改めて実感しました。

実習を通し、決して物の雰囲気にならされることなく、物を客観的に見て、自分の考えを持ち、そして調べることにより、知識を蓄えていかなければならないと思いました。そして、自分が得たものをその場限りで終わりにするのではなく、さら



に積み重ねていくことが大切だということを学びました。この一年間で、私は大分成長できたと思います。

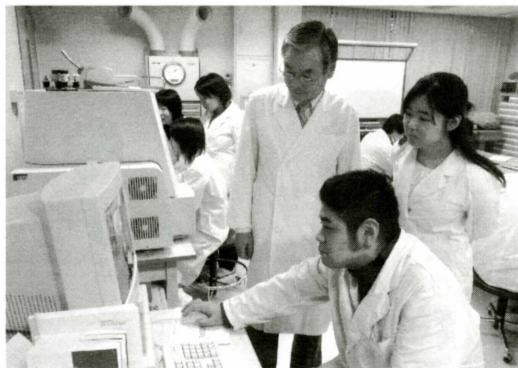
発掘実習を体験して

2年 村松 彩美

平成16年夏期休暇中、大学敷地内の実習棟において、一週間の発掘実習が行われました。文化財学科の2年生は、7月末から8月初めの班と、9月中旬の班の2つの日程に分かれ、それぞれ実習に取りかかりました。

発掘実習は朝9時から開始されるため、8時45分までに集合しなければなりません。私の自宅は鎌倉にあり、普段は1時間程で学校に着きますが、実習棟は駅からさらに30分の場所にあるので、いつも以上に早起きしなければなりません。初日は、草刈りの予定でしたが、前日から心配された台風の影響で作業の途中で風雨が強まったため、午前中で解散となりました。発掘実習を楽しみにしていたので力が抜けたとともに、限られた実習時間の中で全作業が無事終わられるのか、不安になりました。しかし次の日からは天候も回復し、順調に作業が進められていきました。

発掘実習を体験して大切だと感じたことは、調査において一人ひとりに責任が伴うのだということです。現代に生きる我々は、昔の人々の生活を研究することができる位置にいるのですから、正確に記録し、遺物を動かさないよう慎重に作業することは当然のことです。また、周りとの協力し合わなければ調査をすることもできません。「責任、正確に、慎重に、協力し合う」ことは、考古学の場にも限定せず、いかなる分野においても共通する大切さではないでしょうか。勿論、文化財の各分野にも言えることだと思います。発掘実習を終えて、改めて文化財学科に在籍している自分に何が大切なのかを学ぶことができたと思います。



3年次の実習

3年 唐澤 雅俊

1年次の巡検と土器復元、2年次の古文書修復と発掘実習に続き、3年次では実習ⅢAとして、保存科学の実習を行う。

文化財を保存・修復する際には対象となるものによってその方法も様々であり、よく考えて保存していかなくてはならない。この実習では試料の作成から始まり、このことを調査するにはどの機器を使用するのが適切かを自らが検討し、各種の分析機器の取り扱いを学んでいくものである。毎週のようにレポートが課題として出されるので大変だが、毎時間緊張感を持って真剣に実習に臨むことができた。

夏休みには実習ⅢBとして、卷子や掛軸などの文化財の取り扱い方を学ぶ。目で見るだけでなく、実際自分の手で文化財を取り扱う事の難しさや大切さを実感できた。さらに、博物館でよく見かけるキャプションと呼ばれる説明文を作成する実習もあり、普段見慣れていても、自分で考えると勝手が違うので、とても大変な作業である。

また学外実習として2泊3日で国内の文化財や施設の巡検がある。毎年違う地域へ行き、私達の学年は奈良に行った。中学校の修学旅行で一度訪れたことのある東大寺にしても、大学で文化財について学んだ後の目で見ると、ただ大きいと感じた中学生の時とは違い、細部の造りに自然と目が行くようになっていた。さらに数々の保存処理施設も訪れ、保存修復作業を間近で見学することができてとても勉強になった。

3年次では以上のような実習を行うが、巡検一つをとっても、これまで学習してきたことを活用して1年の時の巡検とはまた違う観点から見ることができた。

実習Ⅳと課題と卒業論文

4年 北泉 剛史

実習は、国内・国外・自主の3コースがあります。国内・国外コースは7月下旬に事前指導が行われ、8月下旬から9月上旬の一週間程度の行程で現地の文化財を見学、自主コースは所属するゼミの担当教員に相談し、5月上旬までに研究計画書の作成、全コース共に10月末までに課題・事後レポートを提出します。本年度は国内コースが北海道、国外コースがタイ・カンボジアでした。

ところで、「どうして4年生にもなって、わざわざ一週間も旅行するの?」という声もあると思いますが、個人的な経験と解釈でこの答えを出すのであれば、それは、“実践的に自分の視点で対象を見るため”といえます。課題は旅行の後半に発表されますので、ガイドブックにはないオリジナルの考えを練りつつ見学していく必要があります。難しいような気がしますが、ゼミが始まり一年も経てば、自ずと興味も分かれるでしょうから、そのなかで自分なりの発見があれば、苦しむことなく課題をこなせるはずですよ。

しかしながら、実習Ⅳは卒業論文と同時進行になるため、この時点で論の構成や資料収集で不安な場合は、それが気がかりとなり、どちらも中途半端になってしまうことが考えられます。それを避けるために、実習Ⅳと体調を整える期間を含め、10日間ほどは思い切って卒業論文を頭から切り離すことをオススメします。そうすれば、再び取り組むときに、ふとしたことで何か良い考えが浮かぶかもしれません。

簡単に話を進めてしまった感がありますが、結局は自分のやる気次第であることに変わりありません。ですから、自主的に物事を学ぶ姿勢を大切にして下さい。それを試そうとしているのが、実習Ⅳの目的なのだと思います。



研究部会報告

研究部会連合

昨年度発足以来、月1回程度の会合を行い、研究部会の運営等の話し合いを行っています。また今年度は、連合誌『財の穴』を発刊しました。これは、新入生や研究部会をよく知らない人たちに、こういった活動をしているのかを知ってもらうための、活動内容を簡単にまとめた広報誌です。2004年12月には各研究部会の年間活動報告会として「第2回 研究部会活動報告会」を行い、昨年度と同様に研究部会の活動成果を発表しました。

さて、文化財学会に最初の研究部会が誕生して来年度で7年目を迎えようとしています。昨年度研究部会連合も発足し、各部会とも益々盛り上がっていきたいところですが、現状としては、部会員数が伸び悩み、いずれの研究部会もぎりぎりの人数で活動しているのです。これは、我々部会員の責任ですが、年々新入生の研究部会に対する興味が薄れているようにも感じられ、それが最大の原因ではないかと思えます。今年度、4期生が卒業しますと、現部会の発足メンバーと言える学生がほとんどいなくなってしまい、今後各部会ともさらに厳しい舵取りが予想されます。他学年との交流、勉強のためなど、理由は何でも構いません。是非一度ご参加下さい。また、卒業生の参加もお待ちしております。すでに、連合内では来年度に向けて着々と企画を予定しておりますのでご期待下さい。文化財学会の更なる発展のためにも、皆さんのご協力を是非ともお願いいたします。

江戸東京研究部会

「江戸東京研究部会」は2000年4月の発足以降、巡検を主とした活動を展開してきました。2004年は一貫したテーマは設けず、毎回様々なテーマで巡検を行いました。また、他部会との合同企画、芸能鑑賞会といった今までとは違った形式の活動にも挑戦し、ご好評頂きました。

2004年は2月7日に行った第14回『江戸城跡を巡る』が最初の活動となるとともに、昨年度の4年生の引退企画でもありました。石田先生にもご参加いただき、江戸城跡とその周辺を歩き、見学計画地39カ所、参加人数17名という今までにない大規模なものとなり、大変有意義な巡検となりました。4月17日、美術工芸研究部会との合同企画として第15回『浮世絵 江戸名所七変化一見学会』を行いました。これは江戸東京研究部会初の展示

見学のための活動でした。6月26日、第16回『浅草—江戸の風俗史を巡る—』と題し、吉原に関する場所を中心に三ノ輪～浅草を歩きました。7月8日、第17回『神奈川と横浜の開港時の史跡を巡る』と題し、二年生が企画し、東神奈川から桜木町を炎天下のもと歩きました。11月21日、第18回『高島秋帆一派による武州徳丸原の西洋砲術演練』と題して、近世後期の西洋砲術家高島秋帆の江戸における足跡を辿ろうと、石田先生にもご参加いただき、文京区白山から板橋区高島平を巡りました。12月18日、第19回『文楽鑑賞会』として国立劇場で文楽鑑賞教室に参加し、鑑賞後には舞台裏方ツアーも行い、非常に貴重な体験となりました。

2005年度も巡検活動の充実を図るとともに、他部会との連携も深めていきたいと思っています。

鎌倉研究部会

「鎌倉研究部会」は部会のテーマでもある「鎌倉」を基に、今年度も巡検・勉強会を行いました。第1回巡検は、鎌倉極楽寺方面へ行きました。年に一度の花祭りの日に公開される忍性塔を中心に石塔巡りを行いました。そして、事後勉強会では巡検の企画者に石塔についての解説をしていただきました。第2回巡検は神奈川県立金沢文庫の特別展『金澤貞顕の手紙』を見学しました。その後、ご参加いただいた河野先生と共に、「称名寺絵図井結界図」を基に寺の周囲を歩き、結界の同定を行いました。11月に行われた第3回巡検は、鎌倉方面へ行き、円覚寺風入れ、鎌倉国宝館特別展『鎌倉考古風景』を見学しました。国宝館ではご参加いただいた河野先生に展示品の解説をしていただきました。途中、円覚寺で河野先生の靴が履き違えられるといったハプニングもありましたが、大変有意義な巡検となりました。

また、今年度は屋内活動として『吾妻鏡』の講読を後期から開始しました。大学院生の方にご協力いただき、着々と読み進めています。今までになかった活動なので、今後も継続していきたいと思えます。来年度の活動も巡検を中心に予定しています。皆さんの参加（特に1・2年生）を部会員一同お待ちしております。

古典芸能研究部会

「古典芸能研究部会」では、10月17日に上野雅楽会と八千代市立郷土博物館が主催する『上野雅楽会雅楽鑑賞会』に参加しました。雅楽とはどういうものであるか、基礎的な知識を得る目的も含め、1年生の希望者とともに指導を受けました。

当日は越天楽・陵王・長慶子などの有名な曲を鑑賞するほか、1年生は雅楽器の体験、3年生は指導のお手伝いをするなど、それぞれ大きな成果が得られました。続いて11月21日には、毎年葛原岡神社で行われている、『日野俊基御祭』に先導を務める伶人として参加しました。今年は本学と東京藝術大学OB・國學院大学の3大学の有志でセッションを組んだほか、バイオリン・オカリナでの奉納演奏もあり、例年とは一味違ったお祭りとなりました。

なお、今年は昨年好評だった装束勉強会を予定していましたが、お招きする先生との調整がとれず、年内の勉強会が実現できませんでした。来年度は、他部会との合同企画のほか、装束勉強会を行う予定です。

美術工芸研究部会（鶴鳴会）

「美術工芸研究部会（鶴鳴会）」の2004年度の活動について報告します。今年度の最初の活動は、4月に江戸東京研究部会と合同で、神奈川県立歴史博物館特別展示『浮世絵 江戸名所七変化』の合同見学会を行いました。当部会の要素と江戸東京研究部会の要素が合致した企画で、見学会後の合同反省会では、感想を述べ合うなどの意見交換を行い、非常に有意義な企画となりました。同月の別日には、本学教授の岩橋先生の御指導のもと、美術品の取り扱い講習会を行いました。講習会では主に掛軸・巻子の取り扱い、紐の結び方を習得したほか、4年生の先輩からお茶の作法を教わる事もありました。この講習会は、人数の都合上公開していない為、部会員のみの活動となりました。5月には根津美術館へ行き、『南宋絵画一才情雅到の世界』を鑑賞しました。そして6月には、『ほとがらin鎌倉 夏』と題して鎌倉方面へ行き、北鎌倉の路地・葛原岡神社・源氏山公園・銭洗弁財天社・佐助稲荷神社・長谷寺を歩きながら、個々が自由に写真を撮るといった新しいスタイルの活動をしました。現像後は自分のお気に入りの一枚を発表するなど、発表会兼反省会を行いました。7月・10月には美術品の取り扱い講習会を行いました。11月には、再び『ほとがらin鎌倉 秋』を企画し、前回と同じ道順を歩きながら秋になった鎌倉の写真を撮りました。

以上が今年行ってきた活動になります。来年度の活動予定は未定ですが、美術工芸品の取り扱い講習会を徐々に公開し、人数を増やして行きたいと考えています。

日本精神研究部会

「日本精神研究部会」は、引き続き昨年度と同じテーマの『梵字』で活動を行いました。しかし、ほぼ個人的な研究や制作に終始しており、これといって部会という機能を十分に生かした活動は行ってきませんでした。そこで、本年の活動目標として、「有言実行」を掲げ、本来の部会としての日本精神研究部会を取り戻し、先代の業を復活させるとともに、また、次世代を担う新入部員の獲得にも力を入れ、堂々と胸を張っておもてを闊歩すべく、有意義な活動をしていこうと思っています。今年も日本精神研究部会をどうぞよろしく願います。

歴史考古学研究部会

「歴史考古学研究部会」は前年度、主に鎌倉を拠点に活動していたのですが、今年度はその地域に固執することなく、本部会の基本理念である関東全域に目を向けた活動を行いました。まず、第1回現地巡検を8月17日に『鎌倉から金沢・六浦津へ』と題して、鎌倉から紅葉やぐら・北条高時腹切りやぐら・黄金やぐら・釈迦堂切通し・東泉水ヶ谷やぐらを巡り、朝比奈切通しから熊野神社を通過して金沢八景まで歩きました。金沢八景では、瀬戸神社や中世の港として栄えた六浦津を見学し、中世鎌倉への流通経路のひとつを実際に歩くことで再認識しました。尚、この巡検に際しては、6月末より数回の勉強会と事前説明会を行い、部会員がそれぞれテーマを分担してレジュメを作成しました。

11月17日には第2回現地巡検を『歴博に行ったことある!? in佐倉』と題して、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（以下、歴博）を中心に周辺史跡を巡りました。品川駅から京成線の大佐倉まで行き、戦国期に千葉氏の拠点であった本佐倉城を踏査し、再び京成線の佐倉駅へ戻って歴博内をじっくり見学しました。歴博は実習ⅠAでも行かない場所のため、参加者にとっては新鮮に感じたようです。

今後の活動としては、栃木県や茨城県などに足を伸ばすことも考えており、活動範囲を徐々に広げながら、各地の歴史的な様相を捉えていければと考えています。また、学会報が皆さんのお手元に届くころには、毎年恒例となっている『鎌倉やぐらツアー』も2月に行われていることでしょう。少しでも活動に興味を持った方は歴史考古学研究部会の門を叩いてみて下さい。

- 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く。
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。
付2 平成16年4月1日 一部改正

平成17年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日 時 6月4日（土）

総会（午後1時から）

講演会（午後3時から）

会 場 鶴見大学会館メインホール

講 演 「薩摩琵琶の演奏

—平家物語の世界」(仮)

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月12日（土）午前11時から(予定)

会 場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「仏教文化財について」(仮)

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行

編集後記

あつという間に一年が過ぎてしまったように思います。ふり返ってみれば春・秋の大会とも初めての経験でとても緊張しましたが、楽しみでもありました。実際は先輩の後ろについていただけという気もしますが、充実した時間を過ごせたと思います。

会報の方は、先輩方の実習の感想を読んでみると来年も大変そうだと思いつつも楽しみになりました。そして研究部会のページも部会をあまり知らなかった人には知ってもらおう一つのきっかけになっているはずです。

来年は私達が新入生に学会とは何をしているのかを、この一年間に学んだこととして少しでも教えられればいいと思います。

(編集委員)

鶴見文化財学会報 vol.6 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.6 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

- ・ P5 「学会右見左見 文化財学科の学生としての一年」

誤：私自信、文化財学科に入る前は、

正：私自身、文化財学科に入る前は、

- ・ P7 「学会右見左見 人脈を作ろう」

誤：コネや縁故といったものが頭に思い浮かぶ。

正：コネや縁故といったものが頭に思い浮かぶ。

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。